

口腔機能の発達に注目した「ことばの力」支援プログラムの効果検証

日高 玲奈 （東京科学大学大学院 地域・福祉口腔機能管理学分野 准教授）

【背景・目的】

知的障害とは、「知的機能の障害が発達期にあらわれ、日常生活に支障が生じているため、何らかの特別の援助を必要とする状態にあるもの」と定義される。特別支援学校の指導要領には、知的障害児の言語等における課題を踏まえた上で指導・支援する必要があると明記されている（文部科学省，2019）。知的障害児の言語や言語を介してのコミュニケーションの課題は障害特性に由来するものがある一方で、口腔機能が十分に発達していないことにより、ことばを発しても相手にうまく伝わらないといった課題も存在する。しかし、知的障害児のことばの発育と口腔機能に関連した研究はほとんど存在しない。そこで本研究では、知的障害特別支援学校の児童生徒の発語の状態と摂食に関連した口腔機能を評価し、対象者に適した口腔機能向上訓練を実施することで、発語への影響を検証することを目的とした。

【方法】

2023 年 4 月から 2025 年 9 月にかけて、東京都内にある知的障害特別支援学校の小学部・中学部・高等部の 1 年生 60 名と、1 年生の担任教員 34 名を対象とした。口腔機能やことばの発達については、歯科衛生士が半年に 1 回給食時に食事風景を観察するとともに、授業中や休憩時間の様子を観察して、評価を行った。口腔機能は口腔過敏および捕食、咀嚼、嚥下の各項目に対して、5 段階評価で行った。1 点が「悪い、まったくできない、あり」、5 点が「良い、問題なくできる、なし」で評価した。ことばの発達については言語発達の段階（発語なし～物語（日常生活上のコミュニケーションに支障なし））とジェスチャーの有無について評価した。また、学校の健康診断の情報から障害名や障害の程度に関する情報を収集した。知的障害の程度については、東京都が配布している知的障害の程度を示す「愛の手帳」の等級で区分を学校の記録から抽出した。「愛の手帳」の等級は、4 度（軽度）～1 度（最重度）の 4 段階に区分されている。教員に対しては、介入前後に質問票を用いて教育経験年数や摂食指導に関する項目などを尋ねた。

【結果】

主障害名は、自閉スペクトラム症が最も多く、次いでダウン症であった。障害の程度については、認定なしの者が 3 名のほか、4 度～2 度まで分布していた。発語がみられなかったものは、初回 9 名から最終 8 名でほとんど変化がみられなかった。「ことばの発達」がみられたものは、小学部で 9 名（42.9%）、中学部で 7 名（50.0%）、高等部で 16 名（64.0%）であった。「ことばの発達」と口腔過敏、捕食と咀嚼の各項目において相関がみられ、特に捕食における口唇閉鎖に関連がみられた。摂食機能では、捕食、咀嚼、嚥下の中項目の合計点を比較するとすべての学部で有意な改善がみられた。初回評価時では小学部が他学部に比べて課題を多く有していたが、最終評価時には、ほぼすべての項目において全学部で改善がみられ、学部間での差はほとんどみられなかった。教員向けアンケートでは、現在困っている摂食課題としては、小学部では「偏食」、「丸呑み」、「食具使用不可」、中学部と高等部では「早食い」、「丸呑み」、「偏食」が挙げられ、「偏食」と「食具使用不可」は小学部と他学年に有意差がみられた。教員の経験年数による困りごとの差はみられなかった。介入前後で大きな変化はないが、介入後の方がより具体的な回答が得られた。

【結論】

知的障害特別支援学校における児童生徒の「ことばの力」を支援する上で、摂食に関連した口腔機能の評価及び機能向上訓練が有効であることが示唆された。

【本研究の主な成果】

1. 日高玲奈, 中根綾子, 中川量晴, 戸原玄, 松尾浩一郎. 知的障害特別支援学校における児童・生徒の摂食課題. 第 40 回日本障害者歯科学会総会および学術大会 2023. 11. 11 札幌
2. 日高玲奈, 中根綾子, 中川量晴, 戸原玄, 松尾浩一郎. 知的障害特別支援学校に勤務する教員の児童生徒の摂食課題に対する意識調査. 第 42 回日本障害者歯科学会学術大会 2025. 11. 02 大阪